

こども科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）
総合研究報告書

低年齢児保育が子どもの発達等に及ぼす効果・影響の解明のための研究
令和6年度 分担研究報告書

「保育従事者へのアンケートの実施・
『低年齢児保育で困難に感じていること』自由記述回答の分析から」
研究分担者 堀 科 東京家政大学 教授

研究要旨

本研究では、低年齢児保育を実践している保育施設における保育従事者に対しアンケート調査を実施し、「低年齢児保育で困難に感じていること」の設問の自由記述回答を分析した。分析対象は保育従事者による有効回答の2209件である。分析方法として計量的に記述内容を分析するKH Coderを使用した。アンケートの結果から、低年齢児保育で困難に感じていることとして8つのグループが抽出された。8つのグループに対し、次のように命名した。①発達に応じた環境づくり ②子ども理解と保護者対応 ③保育者間ならびに家庭との連携 ④長時間保育等に対応する職員配置 ⑤月齢や個人差に応じた活動内容 ⑥低年齢児特有の様々な配慮への対応⑦子ども同士のトラブルへの対応 今後はアンケートの量的結果や他の自由記述回答との関連から、低年齢児保育における質の担保とその課題について明らかにしていきたい。

A. 研究の背景と目的

我が国の三歳未満児の保育需要の高まりにより、多くの保育施設で低年齢児保育が行われており、様々な種別ならびに形態によることから、その実践内容が多様化している実態がある。こうした背景により、近年、低年齢児保育の質、とくにプロセスの質（OECD 2006*1）等をめぐる議論が活発化している（Fig 1）。一方、低年齢児保育固有の保育の特徴から、保育実践に

おける課題も明らかになっている（野澤他2016*3）、遠藤 2020*4）等）。

本稿では、保育所や認定こども園等で低年齢児保育を実践している保育士・保育教諭が「低年齢児の保育で困難に感じていること」（自由記述回答）の分析から、保育従事者の保育観をもとにした低年齢児保育を構成する要素を検討し、日本独自の低年齢児保育の質を問う視点への示唆を得ることを目的とする。

Fig.1 保育の質の諸側面【OECD2006 Starting StrongII(p.127-128)秋田、淀川(2016)より】

質の諸側面	内容	具体的な説明・例
志向性の質	政府や自治体が見守る方向性	法律、規制、政策等
教育の概念と実践	ナショナル・カリキュラム等で示される教育（保育）の概念や実践	（見本では、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示される保育のねらいや内容にあたる）
構造の質	物的・人的環境の全体的な構造	物的環境（園舎や園庭、遊具や素材・教材等） 人的環境（保育者の養成と研修、保育者と子どもの人数比率、クラスサイズ、労働環境等）
実質運営の質	現場のニーズへの対応、質の向上、効果的なチーム形成等のための運営	園やクラスレベルの保育計画、職員の専門性向上のための研修参加の機会、実践の観察・評価・省察の確保、柔軟な保育時間等
相互作用あるいはプロセスの質	保育者と子どもたち、子どもたち同士、保育者同士の関係性（相互作用）	子どもたちの育ちをもちあわす、安心感や教育的意図等を含み込む、保育者や子どもたちの関係性
子どもの成果の質あるいはパフォーマンスの基準	現在の、そして未来の子どもたちの幸せ（well-being）につながる成果	何をもちて成果とするかは、各々の価値観等によって異なる

B. 研究方法と倫理的配慮

1. 研究方法

全国の低年齢児保育を実施している保育所や認定こども園等のうち、都道府県、施設種、施設設置別がランダムになるよう無作為抽出により調査対象施設を選択した5,000施設に対し、施設長および低年齢児クラスの保育者等を対象とした自記式アンケート調査票を送付および回収を行った（回収率20%、実施期間2024年2月～5月）。

本研究では低年齢児クラスの担任保育者等に対する質問紙調査項目のうち「低年齢児の保育で悩んでいること・難しく感じていること・改善したいこと

があれば教えてください」という設問に対する自由記述回答を分析対象とした。分析対象となる2,727名の自由

記述回答より、自由記述欄が無効（無記載または「特になし」等とした記述518件）となる回答を除く2,209件の記述内容を分析した（Table1）。各回答者のクラス担当等の属性は0歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラス、0・1・2歳児合同クラス、0・1歳児合同クラス、1・2歳児合同クラス、その他である。

分析方法としてはKH Coder（Base edition Ver.3.02 2024, 以下 KH Coder）（樋口 2020 等*5）を用い検討した。

KH Coder では、データクリーニングの上で保育分野における慣用句などの「強制抽出語」により意味のある語の結びつきは抽出できるようにし、一方で接尾語など文脈に影響しない語を「使用しない語」とし、カウントされないように設定した（Table2）。なお、頻出語20位までの語を右表に示した（Table3）。

Table2 KHCoder データクリーニングの一部

総出語数：使用 39500 語/101905語
異なり語：使用 3243 語/3838 語
使用しない語：難しい/感じる/思う

Table3 頻出語上位20語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
保育	1310	環境	292
子ども	1069	言葉	280
子	500	職員	276
多い	427	人数	272
保護者	421	気持ち	265
対応	420	生活	249
発達	355	クラス	244
時間	342	月齢	234
伝える	339	必要	228
関わる	305	思い	220

倫理的配慮：回答にあたって園や個人が特定されないこと、学会等で報告すること等を調査票の表紙に記載し同意を得た上で調査を実施した。本研究は武蔵野大学教育学部倫理委員会の承認を受けている（承認番号 R6-002）

C. 結果と考察

KH Coder による解析では、共起ネットワーク分析を行った。その結果、8つのサブグラフ（Subgraph）に分かれた共起ネットワーク図が描かれた（Fig2）。8つのサブグラフを単語が使われている文脈を示す KWIC コンコーダンスならびに記述内容から検討し、グループを命名した

（Table4）。

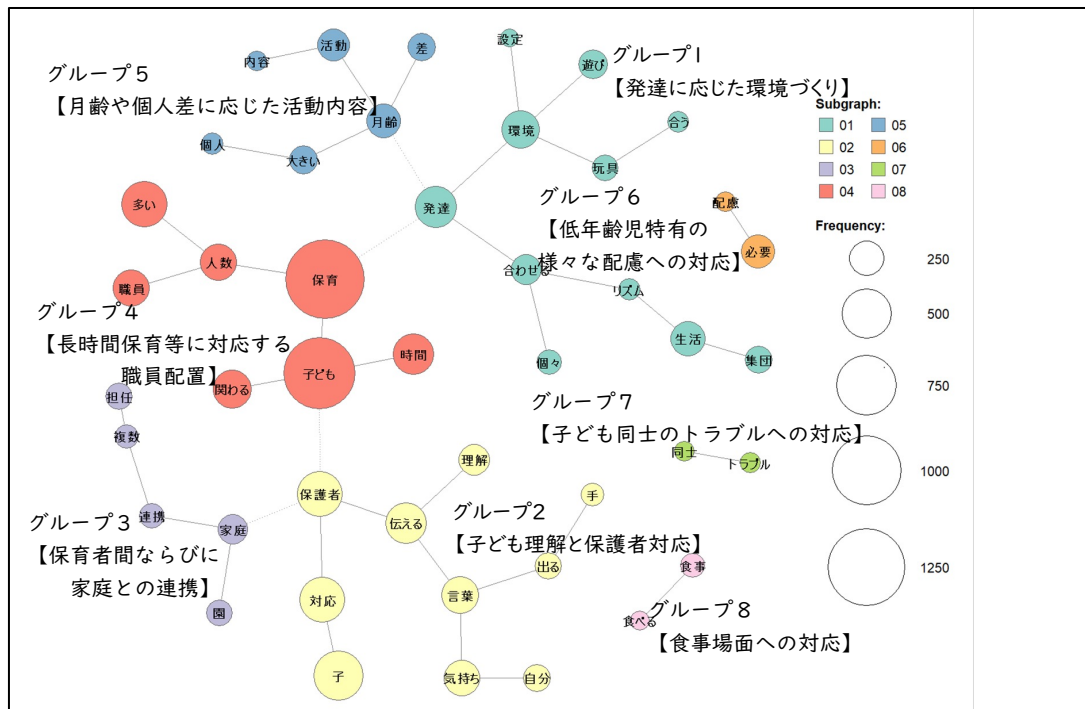
8つのグループ名は、KH Coder によるテキストマイニングの結果

と記述内容から導き出した。グループ1は「発達」「環境」「玩具」といった語の結びつきが見られ、月齢等発達に応じた環境づくりに対する困難さが現れていることから【①発達に応じた環境づくり】とした。グループ2は、「保護者」「対応」「理解」「伝える」等により子どもの育ちを保護者に理解を促すことの難しさとして【②子ども理解と保護者対応】とした。グループ3においては、「複数」「担任」「連携」「家庭」等から【③保育者間並びに家庭との連携】とした。グループ4は「子ども」「時間」「人数」「職員」から【④長時間保育等に対応する職員は多い】とした。グループ5は「月齢」「個人」「差」「大きい」などから【⑤月齢や個人差に応じた活動内容】とした。グループ6は「必要」「配慮」という語や記述内容から【⑥低年齢児特有の様々な配慮への対応】とした。グループ7は「同士」「トラブル」といった語から【⑦子ども同士のトラブルへの対応】とした。グループ8は「食事」「食べる」から【⑧食事への対応】

Table4 8つのグループ名

- ①発達に応じた環境づくり
- ②子ども理解と保護者対応
- ③保育者間ならびに家庭との連携
- ④長時間保育等に対応する職員配置
- ⑤月齢や個人差に応じた活動内容
- ⑥低年齢児特有の様々な配慮への対応
- ⑦子ども同士のトラブルへの対応
- ⑧食事場面への対応 *①～⑧に順序性や多寡は含まれていない

Figure2 共起ネットワーク図



とした。なお、グループ①～⑧の順序性や回答数の多寡については分析の対象としていない。共起ネットワークによって描かれた8つのグループに属するコメントの一部をTable5に例示した。

D. 総合考察

低年齢児保育において、保育者等が抱えている悩みや困難さとして、テキストマイニングにより8つのグループが見出され、その要因が導き出された。8つのグループはそれぞれに関連しあっており、主として物的・人的環境の課題、月齢差や個人差に伴う個別の対応（主として食事場面）、保育者間の連携と保護者への対応の難しさ、子ども同士の関わりの難しさが挙げられ、これらはプロセスの質に関わる内容であった。自由記述からは困難さに加え「～したいが」といった保育者等のそれぞれの保育観を土台にした理想的な保育のありようも記載されていたが、その理想があるからこそ、現状の営みとの違いに困難感をさらに助長しているともいえよう。今後はこうした課題と保育の質との関連性を検証していきたい。

E. 引用文献

- *1) OECD (2006) *Starting Strong II: Early Childhood Education and Care*. OECD Publishing;Paris (OECD (2011) 保育白書—人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア—星 三和子・首藤 美香子・大和 洋子・一見 真理子（訳明石書店）
- *2) 厚生労働省(2018) 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（第6回）保育所等における保育の質の確保・向上に係る関連資料 参考資料
- *3) 野澤祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤利彦・秋田喜代美(2016) 乳児保育の質に関する研究の動向と展望, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 56, 399-419.
- *4) 遠藤純子(2020) 乳児保育の質をめぐる現状と課題—関係性をベースとした保育の展開に向けて— 学苑 昭和女子大学紀要 956号 2-17.
- *5) 樋口耕一(2020) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— 第2版 ナカニシヤ出版

F. 研究発表

- 1.論文発表：なし
- 2.学会発表：日本発達心理学会第36回大会ポスター発表「低年齢児保育を担当する保育士・保育教諭の保育観 2 低年齢児の保育で困難に感じていることの記述分析から」2025年

G.知的財産権の出願・登録状況：なし

Table5 低年齢児の保育で困難に感じていること」のグループ【概念】別 自由記述回答例

グループ名	自由記述 コメント代表例
グループ1 【発達に応じた環境づくり】	・子ども一人一人とゆったりと関わりたいが、慌しくなることがある。例えば、食後～昼寝までの時間、安全面や衛生面に配慮しているが、保育者の声が大きくなることもあるので、保育者一人一人気を付けて落ち着いて保育すること。あそびや玩具など保育室の環境づくり、整理など設置が難しい。（室内のスペース、部屋の数など今の環境での工夫）
	・子どもの人数が多いことや、月齢の差があることから、同じ玩具や環境で過ごすには、限度がある。限られた環境と物で悩むことがある。
グループ2 【子ども理解と保護者対応】	・一人一人の生活リズムの違い、月齢差など活動を考えていくことに難しさを感じることもある。保護者対応の中で、発達のことやその子の性格を踏まえた上で悩みに答えていくことに難しさを感じる。 ・様々な感染症がある中、感染症への理解を保ご者に促す事が難しいと感じる。（感染症になって移さないようにする方法（受診、登所を控えてもらう、家族が感染した場合、等）コロナが5類になってからの対応等 保ご者に協力を求めても理解してもらえないこともあった） 子どもの成長発達のための保ご者の協力援助が十分に得られず、施設内だけで援助するということがあった。
グループ3 【保育者間ならびに家庭との連携】	・一人一人の子どもに対しての関わり方のポイントや大切にしたいことなどはそれぞれ違っていて、その方法も一定ではない為、担任間での共通認識や連携がしっかりと取れていないと受け止めていくのは大変だと感じる。
	・子どもが言葉がうまく出せない為、家庭との連携がとても重要だが、うまく連携がとれないこともあり、難しいと感じることがある。ナイーブな保護者が多くなってきている為言葉の使い方も難しい。食事がなかなか進まない子も多く、食生活の把握も難しい。自我の芽生えから、対応も工夫が必要になっている。
グループ4 【長時間保育等に対応する職員配置】	・年度途中の入園児が多く人的（新入園児、追加入保育教諭）環境が変わってしまい、その都度保育の立て直し、在園児の安心の保証、追加保育教諭との意思疎通、連携が難しく感じている 母親の就学時間により長時間保育のお子さんが増えていることで預かり保育の工夫、安心できる環境（場所、人的）の確保が難しく感じている 個々の生活リズムを大切にしているため午睡時間がバラバラになり、午睡中の業務、職員間での話し合いの時間の確保が難しく感じている。
	・子ども一人一人の気持ちに应答的に関わりたいと思っはいるのですがどうしても職員の人数であったり状況的に出来ない時もあり悩むことがあります。保育者も一人一人保育観だったり思いがあり全員が同じ方向性を持って保育することの難しさを感じています。雰囲気の良い職場にするにはと日々考えています。
グループ5 【月齢や個人差に応じた活動内容】	・一人一人の生活リズムの違い、月齢差など活動を考えていくことに難しさを感じることもある 保護者対応の中で、発達のことやその子の性格を踏まえた上で悩みに答えていくことに難しさを感じる ・0,1歳児混合クラスは、年齢差による発達の違いから、園生活を全て一緒に行うことは難しいです。「0歳児にとって必要な午前睡は確保したいが、そうすることで全体での活動が難しくなる」「給食時間も1歳児にあわせると0歳児はちょうど眠くなってしまい機嫌が悪い、又は0歳児に合わせると1歳児にとっては早い給食時間となってしまう」など、基本的生活習慣において、子どもたちにとって好ましくない状況ができてしまいます。日常生活を送る中で、異年齢が心地良く過ごせるように保育者間で話し合い、実践しています。近年は無理をさせてまでどちらかの活動や生活リズムに合わせるというのを止めて、各年齢に合わせた保育へとシフトチェンジしています。保育者間での語り合いの時間を確保し、共通理解、実践できるように取り組んでいきたいです。
グループ8 【食事場面への対応】	・家庭環境がすぐに情緒面行動に表れる年齢であり1対1での関わりが求められやすい。また活動食事睡眠時全てにおいて生命に関わるので一瞬たりとも目を離せないでここにもう一人保育者がいれば安全になおかつ楽しく心穏やかにお互いに過ごせるよう保育者の配置基準を引き上げてほしい。迅速な対応よろしくお願いします。
	・食事を見ただ目で嫌がり一口も食べない子がいる。全部食べることが大事だとは思っていないが1口も食べない時は、1口でも食べてほしい（味を確かめてほしい）気持ちがあり…だけどつきっきりになってしまうのとこちらの精神的にも厳しく難しい